

「ヤマネコ可愛い！」を きっかけに、長崎の自然に 興味を持ってほしい

九十九島動物園飼育員

村山友美



むらやまともみ
長崎大学環境科学部卒業後、和歌山アドベンチャーワールドに就職してジャイアントパンダを担当。パンダの出産、子育てを間近に観察する。2009年より西海国立公園九十九島動物園森きらの飼育員としてツシマヤマネコの繁殖に携わる。現在の担当はツシマヤマネコのほかに、ツシマシカ、5メートル以上の巨大なアミメニシキヘビなど。

人に馴れさせない
ギリギリの距離感

「ほら、やまと、エサだよ。そんなところに登ってないで、降りておいでよ。やまと」

どうもいつもと勝手が違うな…と警戒するように上から見下ろしていた一匹が、やおら立ち上がり、のっそり。歩く姿は、あきらかにネコとは違う、ヒヨウのような精悍な体つきのやまと、オス七歳。国の天然記念物ツシマヤマネコです。村山友美さんが肉挟みでつかんだ馬肉をフェンス越しに差し出すと、やまとが後ろ足で立ち上がり、ちょうど顔の高さの生肉にかじりつく、ペロリ。しかしその後は、ねだるわけでもなく、丸い瞳で村

山さんをしつと見るやまと。その距離間は絶妙。

「ツシマヤマネコは将来的には山に帰しますから、現在飼育中の親世代の個体でも人間に馴れない方がいい。馴れると人間の生活域に近寄りすぎて交通事故にあたりして危険なのです。すごく可愛いんですけどね、ここはがまん」。

長崎大学環境科学部の卒業生である村山さんは、佐世保市の九十九島動物園に来て丸四年。その前は和歌山県のアドベンチャーワールドで、なんとパンダの繁殖を主に手掛けてきたのだそう。ジャイアントパンダは園の看板的な動物でしたから、責任もひときわ重く感じました。何かあったら国際問題になってしまう。でも、赤ちゃんが産まれて大きくなる一

年間のサイクルを見られたので、そろそろほかの動物をやってみたいなど思っていたところ、私の地元佐世保にツシマヤマネコが繁殖事業の一環で来ると聞き、それですら希望して来ました」。

まだ確立されていない
からこそその面白さ

在学中からツシマヤマネコの子育てを研究してきた村山さん。しかし入学した当初は、動物にかかわる何か…という漠然とした思いしかなかったといいます。

「研究室を決めるとき、初めてツシマヤマネコを意識しました。長崎県で育ったのに、同じ長崎の希少種を知らないなんてもったいな

いな、と。環境科学部では、環境に関わる事柄を、まずは広く浅く知ることができて、そこからゆっくりテーマを絞り込んでいけるのが、私にはよかったですね」。

対馬の生態系の頂点とはいえ、約一〇〇頭の生息数しか確認されていないツシマヤマネコ。昨年は交通事故で十三頭が命を落としており、繁殖は急務とされています。「ヤマネコの繁殖期には、この展示用の施設ではなく、非公開の繁殖用の施設に移します。やはり人の声や他の動物の鳴き声などが聞こえるとストレスで落ち着かないので、それからオスを何頭かのメスの部屋の前の通路を歩かせてお見合いをし、同居、そして交尾へ。でも難しいですね。相性がよさそうだと合わせてみると、どちらか

「環境」は多方向から
アプローチができる

ヤマネコに噛まれることもあるんでしょか？

「ありましたね。エサをやるときにヤマネコの前足が私の手にひっ

かかって、それに驚いて、私の長靴の上からがぶりと…。だからその子は悪くないんです。距離感を読むのがプロですから動物に噛まれるのは恥ずかしいこと。

あくまでヤマネコ目線の村山さん。動物のエサやり体験やガイドなど、来園する子どもたちとの交流も、この仕事の楽しさとも。

「佐世保の子どもたちは、みんな必ずここに来ます。最初は、ヤマネコ可愛い！でいいと思うんですけど。それがきっかけになって、長崎県の自然や生態系などに興味を持ってもらえたら嬉しいですね。同じ環境科学部で学んだ友人たちは、公務員や会社員になる人もいれば、山に入って動物の行動観察をする人など、進路はさまざま。最近気づいたのですが、『環境』は人間の生活のあらゆる場面に関わってくるということ。どんな仕事に就いても、積極的にアプローチができます。だからまだやりたいことがはつきり見えないという高校生にもお勧めですよ」。

今は自分のことよりヤマネコの子どものことが最優先という村山さん。夢中になるものをしっかりと持っている人特有の、キラキラした目で語ってくれました。

